

早いもので2年間続いたこの連載もいよいよ最終回となった。最後に何を取り上げるべきかずいぶん迷ったが、この連載では私自身が不思議だと思い、考えて来た問題を中心に書かせていただいている。だから最終回も自分で長らく謎だと感じて来たテーマを取り上げることにしよう。それは接続法のいくつかの用法である。

接続法とは何か

謎にアタックする前に、そもそも接続法とは何かを見ておこう。直説法は英語では別名fact mood(事実モード)と呼ばれていて、事実・現実(と話し手が判断していること)を表わすときに用いられる。だから、*Je pars pour la France.*「私はフランスに行く」と直説法で述べると、実際に実現されるのが近い未来のことであろうとも確定した事実と受け取られる。

これに対して条件法は1月号でもお話ししたように、事実・現実の裏返しのパラレル・ワールドの世界である。したがって、*Si j'avais plus d'argent, je partirais pour la France.*「もっとお金があったら、フランスに行くところなのに」は、「お金がないのでフランスに行けない」という事実を反転させた反現実の世界を表わす。直説法と条件法はこのように一枚のコインの裏と表の関係にある。

それでは接続法はどうだろうか。接続法は英語でthought mood(思考モード)と呼ばれることがある。直説法のように事実でもなく、条件法のように反事実でもなく、事実と反事実を分けることができるほど確固とした地平に着地することなく、いまだ話し手の頭のなかでだけ考えていることがらを表わすのが接続法である。典型的な例として願望表現をあげよう。*Mon père souhaite que je parte pour la France.*「私がフランスに行くことが父の願いだ」では、「私がフランスに行くこと」は単に父の頭の中にある願望であり、まだ事実ともそうでないとも決まっていない。*Il faut que tu partes pour la France.*「君はフランスに行かなくちゃね」も同じで、「君がフランスに行くこと」を話し手である私が頭のなかで「必要だ」と判断しているだけである。*Je voudrais rentrer avant qu'il ne pleuve.*「雨が降る前に帰りたい」でも、雨はまだ降っておらず、単なる私の想定にすぎない。

だから教科書の説くように、主節に命令(*J'ordonne que...*)、願望(*Je voudrais que...*)、危惧(*J'ai peur que...*)、必要(*Il est nécessaire que...*)などの表現があったり、*pour que*「～するために」、*à moins que*「～でない限り」、*à condition que*「～という条件で」などの接続詞があると、その後の動詞は接続法に置かれるのである。

だいたい教科書の説明はこのような範囲に留まっているが、私の経験ではこのあたりで頭が混乱する学生が多いようだ。というのも*Si je pouvais parler italien!*「イタリア語が話せたらなあ」という願望表現では接続法ではなく半過去が使われている

し、そもそも条件法の表わすパラレル・ワールドだって「頭のなかで考えた世界」ではないかという疑問が湧くからである。これは当然の疑問であって、疑問に思わないほうがおかしいくらいである。条件法の場合は、「現実」という確固たる基盤があってその上で現実と反対の世界を頭に描くのだが、接続法はそうではなく、現実か否かを定められるほどの事実性を持たないというちがいがあるという説明を一応はすることができるのだが、実際には条件法と接続法は紙一重で、次の例のように同じ場所で意味のちがいなく用いられることもある。

(1) Je cherche quelqu'un qui *partage* (接続法)/*partagerait* (条件法) cet appartement.

「このアパルトマンのルームメイトになってくれる人を探している」

感情表現の接続法

しかしここでお話ししたいことは接続法と条件法の微妙な関係ではない。次の例のように主節に「うれしい」「悲しい」などの感情表現があるときの接続法である。

(2) Je suis bien content que nous *soyons arrivés* à un accord.

「話がまとまってよかったです」

(3) C'est dommage que nous n'*ayons* plus de temps pour discuter ce problème.

「この問題を議論する時間が残念ながらもうありません」

この例では「話がまとまったこと」「時間がないこと」はまぎれもない事実・現実であり、単に頭のなかで考えたことではない。なのになぜ接続法を使うのか。これが接続法をめぐる謎のひとつである。教科書はこのような謎には答えてくれない。

ここではこの謎を次のように考えてみたい。(2)(3)の文は「話がまとまったこと」「時間がないこと」を伝える文ではない。もしそうならば、Nous sommes arrivés à un accord. 「話がまとまった」、Nous n'avons plus de temps pour discuter ce problème.

「この問題を議論する時間がもうない」と直説法を使って述べるはずだ。(2)(3)の文はそれぞれ「たいへんうれしい」こと、「残念である」ことを伝える文である。つまり文の伝える意味の比重は主節の感情表現にある。だから従属節の内容は話し手が表明する「うれしい」とか「残念だ」とかの感情のきっかけを作ったにすぎず、その内容が感情という入れ物に含まれて表現されるため、ことからの事実性は宙吊りにされてしまう。このため頭のなかで考えたことと同じ扱いを受けて接続法になるのである。

譲歩表現の接続法

接続法をめくって長年私の頭を悩ませてきた問題がもうひとつある。次の例のようにないわゆる逆接・譲歩表現が要求する接続法である。逆接とは「～にもかかわらず」、譲歩とは「いかに～であろうとも」という意味をいう。

(4) Bien qu'il *soit* en mauvaise santé, Jean continue à travailler dur.

「体の具合が悪いのに、ジャンはきつい仕事をし続けている」

(5) Si riche qu'il *soit*, il ne pourra pas acheter un château.

「いかにあいつが金持ちだとはいえ、お城は買えまい」

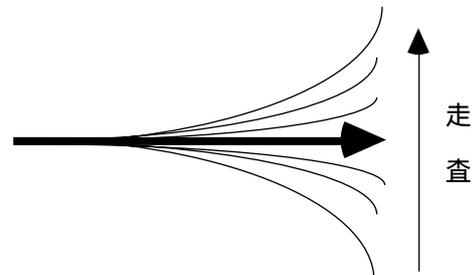
(6) Où que tu *ailles*, je te suivrai.

「あなたがどこへ行こうともついて行くわ」

ここでも「ジャンの体の具合が悪いこと」「あいつが金持ちであること」は事実である。なぜ逆接・譲歩表現ではたとえ事実であっても接続法になるのだろうか。ここでは感情表現のときに用いた「意味の比重が主節にあるから」という論法は使えない。フランス語教師としてこれをうまく説明できないことは、長年私の悩みの種だった。他の先生方はどう説明しておられるのだろうか。

これを考えるには英語が参考になる。si riche qu'il soitは英語でhowever rich he may be, où que tu aillesはwherever you may goとなり、どちらにも-everという語が顔を出す。everはHave you ever been to China? 「中国にいらしたことがありますか」のように、「過去から現在に至るまでのあいだをしらみつぶしに調べよ」という意味を表わす。この操作を「走査」と呼ぶ。everの否定形はneverだからI've never been to China.は「過去から現在までを走査して一度も中国に行ったことがない」となる。だからwherever you may goは「あなたが行きそうな場所のすべてを走査して」、however rich he may beは「彼が金持ちである段階をすべて走査して」を意味する。ここで大胆に、フランス語でも同じ論理が働いていると仮定してみよう。「いかに～であろうとも」という譲歩表現には、可能性をしらみつぶしにチェックするという走査が働いていると仮定するのである。だがこれがなぜ接続法に結びつくのだろうか。

私たちが現実だと考えている世界を慣性世界(monde inerte)と呼ぶ。放っておけば自動的にころがってゆく世界である。しかしこの他に世界がたどりうる道筋は無数にある。これを可能世界(monde possible)と呼ぶ。可能世界はパラレル・ワールドである。慣性世界と可能世界は右図のような関係をなしていると考えられる。右向きの太い矢印が慣性世界で、上下に枝分かれている細い線が可能世界である。



ここでoù que tu aillesを例にとると、慣性世界であなたが行く場所はひとつしかない。しかし可能世界ではあなたが行く場所はいくつもありうる。où que tu aillesが表わしているのは、慣性世界だけでなく可能世界においてあなたが行く場所をすべて走査するということである。慣性世界は事実・現実である。一方、可能世界は現実ではなく、頭のなかで考えられただけの世界である。だから可能世界の走査には接続法が使われるのではないかというのが目下の

私のアイデアなのである。

それではIl sort bien qu'il pleuve. 「雨にもかかわらず彼は出かける」のような逆接で接続法が使われるのはなぜか。これも慣性世界という考え方で説明できるように思われる。慣性世界は因果の連鎖が直列的に結ばれている世界である。Il fait beau.

Il sort. 「天気がよい 彼は出かける」というのが私たちがふだん認めている慣性世界の因果関係である。逆接はこの関係を破って因果の連鎖にねじれをもたらすことで、慣性世界の外に出て可能世界を呼び込んでしまう。これが逆接表現で接続法が使われる理由だと考えたい。

フランス語のしくみの話だったはずなのに、えらく大風呂敷を広げたと感じた方もおられるかもしれない。私たち言語学者はコトバのしくみと成り立ちを研究しているのだが、その途上で人間のココロも考えなくてはならないのではないかと思うようになった。この連載の隠し味は実は人間のココロの仕組みである。フツーにフランス語を勉強している人はそこまで考えなくてもいい。しかし「なぜ」という疑問を抱いたとたんに、目の前に広くて深いコトバとココロの世界が開けるのである。最後にご愛読いただいた読者の方々にお礼を申し上げて、この連載を終わることにしたい。

(とうごう・ゆうじ)